

「それじゃ苦勞されたでしょうね」「いや、私は手に職があったのでわりに楽でした」「それはよかったですね。私はアングレンの炭鉱に丸四年、重労働させられました。運のよい者と悪い者ではまるで天と地ほど違いましたね」と話しながら名刺を交換した。積もる話に若返りした思いです。

「ああ福田さん、大野の美山のお方ですね。それでは支部長の林俊男さん、ご存じですか」「はい、林さんにはいつもお世話になってます」「実はね福田さん、シベリアの苦勞話を文に纏めて書いて貰えませんか」「大分昔のことで記憶も薄れていますが、書いてみますか」「どうぞお願いします」快く引き受けて下さいました。

(福井県 佐々木 清左夫)

## 抑留の記録

福井県 谷崎 喜久雄

出生から入隊まで

大正十五年十月二日、福井県今立郡上池田村で谷崎弥左エ門の長男として生まれた。家業は飯米百姓で、当時は五、六反くらいの田畑と山林は十五、二十ヘクタールで、主に養蚕を年二回、春秋と農閑期に少々製炭をして家計を維持していたようである。

当時の家族は、祖父母と私の父母及び叔父も同居し七人だったが、昭和三年に祖父が死去、昭和四年に妹が生まれ、昭和六年に母が病死し、母が亡き後、妹の子守と母のない淋しさは今でもときどき思い出す。昭和八年に小学校に入学、昭和十三年に高等科へ上がり、昭和十六年に卒業後、東京に上京し、小僧をしながら夜学に通った。その年から父が病氣となり、当年十月には秋の取り入れを手伝いせよとのことで家に

戻ったが、父の容体が快方に向かわず翌年三月には入院し、五月に帰らぬ人となった。父が健在だったら東京に戻る心算だったのにと、長男がための悲しい思いでいまだに悔やまれることがある。

昭和六年に満州事変、昭和十二年に日中戦争が始まり、当時小学生だった私たちは毎月のように出征兵士を送り出すラッパの音や軍歌を数々学校で教えられ、戦争にかかわる講話も度々聞かされたのが、今考えると夢のように思い出される。

昭和十六年十二月には太平洋戦争が始まり、満州、中国で行われていた戦争が一気に世界戦争へとエスカレートしてきたのである。これに伴い学徒動員令の実施や、一般職の若者も男女を問わず徴用されることになってきたのである。当時我が村では小学校二校と僻地には九カ所に分校があったが、若い先生が応召されて教師不在校が始めた。ところが私の父が亡くなる直前、私の奥隣分校もその一分校になったので、その後任に依頼されて、昭和十七年二月からこの分校へ代用教員として任命され就任した。当時の月給が十七円

だったのを今でも覚えている。

#### 兵役入隊から

昭和二十年二月下旬に隣の町、今立町で徴兵検査を受けるように村役場より通達があり、受検したところ、私は第一乙種合格を言い渡された。当時は戦時中のため、一人前の若者は、中等学校以上のほとんどの学生は学徒動員で軍需工場をはじめ男女問わず徴用で引き出され、在郷軍人もほとんど召集を受ける時代のため、私たちの徴兵検査も年齢を一年繰り下げて行われたのである。昭和二十年四月十五日には敦賀連隊に入隊せよとの令状が来た。こうした経過を見るに、当時の日本は小国軍国主義で、いかに無理無益な戦争をしたかがうかがわれる。入隊から終戦までの経過は左記のとおりである。

四月十五日 京都師管区第三六連隊（敦賀金山）

四月十九日 敦賀発の汽車にて九州博多着、泊

四月二十日 博多発、同日、朝鮮釜山港で下船、

泊

四月二十一日 汽車で同日夜、北鮮（当時、平壤師

管区所属第二補充隊に転属入隊し、

二カ月訓練を受ける）

六月末、同右本隊より完全武装で、徒歩訓練名の昼夜行軍（一泊野宿で二日ばかり）で八幡製鉄工場の近くの海州に移動した。翌日より海岸中腹に穴掘り、陣地構築工に従事。

昭和二十年八月十五日昼頃、作業現場から兵舎に戻れとの伝令が入り、兵舎前営庭に集合させられ、当時の分隊長より、本日十二時を以て太平洋戦争は終戦となったと知らされた（日本が無条件降伏）。集まった兵士は無言のまま、涙を流すのみだった。現時点では、次の命令があるまで隊内で待機する。

翌八月十六日朝、点呼時に次のような命令を受けた。この地点は近くに八幡製鉄工場があり、この地はソ連の兵隊が入って来ていて、その所管に属することになったが、我々の中隊は八幡製鉄工場工員の女子、子供を守るため補助憲兵として警備することとなった。従って、近くの工員舎宅に分宿して、次の命令を

受けることとする、として、長屋一室に四人ずつ割り振りされて待機した。

九月一日夜伝令が入り、明二日午前九時に、別紙図面で示した場所に完全武装し、各人の持ち物一切を身につけ集合せよと命令さる。

武装解除から抑留生活の始まり

翌九月二日九時に指定された場所に行ったところ、ソ連軍トラック約十台に剣銃を持つソ連兵士約三十人が待ち構え（通訳が二人いたように思う）、待つこと約一時間して一列横並びに立ち「武装解除」を受け、剣銃はもちろん、所持品も一人一人点検され、所持金銭、腕時計も全部取り上げられた。この間約二時間。済んだ者から一台のトラックに約三十人ずつ合乗りさせられ、午後三時頃同地を出発した。行き先は示さず走行し、約二時間走ったとき、私たちの乗ったトラックが走行中バンクし一行がとまったが、スベアがないとのことで、私たちの車一台のみを残し、他は走り去って行った。私たち約三十人は、その近くの警察に

連れて行かれ、留置場に入れられた。一室に十人くらい入れ、外錠を掛け閉じ込められたが狭くて座れもせず、一晚中飲まず食わず、立ったまま一晚を明かした。従って、前日朝食を取ったままで、翌朝は歩けない者もいたように思う。

### 三合里收容所での生活状況

九月三日朝六時ごろ、留置場より出され再びトラックに乗り走ったが、同日夜着いた所は、私たちが演習させられた平壤師管区三合里演習場であることがわかった。驚いたことには、広い演習場は外周いっぱいには有刺鉄線を二重に張りめぐらし、中には日本兵が三万人は入っているだろうと聞き、敗戦の惨めさをつくづく感じた。

当地へ着いたのも夜になり、收容所へ入れられても、前日来たはずの仲間がどこにいるかもわからず、もちろん兵舎もなし。ここでも食物もなく野宿して夜明けを待ったが、翌日食べ物を少々口にしたのは昼ごろだった。この三合里へ收容された日本兵では、私た

ちが最終に收容されたのではないかと考えられた。

当時はこんな所で越冬する等考えてもみなかったが、当地での秋は日本より遙かに早く、十月初めには霜で真っ白になり驚いた。日本へ帰れるあてもなく、ここでの作業は毎日監視（ソ連兵）つきで、收容所から大八車を引いて炊飯用松材伐出搬入や、馬の飼料兼床敷用干草刈等々の柵外作業。初めは柵周りで割合近距離だったが次第に遠くなり、秋が深まり寒さは身にしみ、日も短くなる。淋しさと冬の降雪を考えると、心配で気が遠くなる連続だった。

毎日の寝泊まりは一個班十五人、一棟天幕、これも各人の携行天幕の継ぎ合わせのため、雨降りには継目からの雨だれがとまらない。床は土間のため、地温が下がれば冷たさが身にしみて来る。この防寒防湿の予防に、敷毛布一枚幅に三、四人が重なり合いのザコ寝である。敷薬用には夏に刈り干した干草だが、入替えした夜二日くらいは寝心地がよいが、五日もすれば「煎餅」になる。週一回ごとに敷き足しする等々、人間生活では考えられないことばかりで毎日を過ごし

た。毎食の炊飯は配給米を飯盒で炊き、おつゆは一個班に一個のブリキ一斗缶で炊く。この一斗缶は洗濯用も兼ねている。

十一月に入れば、外気温が零下十度以下になって、水に入れた飯盒の水が見る見るうちに氷になるという。寒中は毎日零下三十度くらいになることが多く、露天では地下一メートルくらい凍る寒さである。こんな夜は小便に一晚十回も起きるので寝る間がないのが毎夜で、今思い出してもよく生きて帰れたと不思議なくらいだ。降雪量は少なく一晚に二十センチくらいだったが、寒風が強く、一風吹くとどこかへ飛んで地面が白いだけといったくらいだ。

足指先に凍傷を患った人が多かったようだった。こんな生活で野外で幕舎住まいを経験した者にとって、人間の生命力には計り知れないものがあると思った。そんな寒い時でも毎日のように金車を引いて、次第に遠距離になった山野にて松割木材の伐採搬出に収容所外へ出ることが後日には一つの楽しみ、気晴らしになったことも事実だった。

こんな収容所生活をしながら寒い一冬を越した翌二十一年五月初めごろから、平壤駅まで歩かされ貨車に乗せられ移動が始まり、三百人、五百人と団体で収容所を出るようになった。私たちも六月初め貨車に乗り、日本海側北部の元山港で船に乗りかえ、ソ連領の玄関口と言われるウラジオストクの西側、ポセツト港に上陸した。ちょうどそのころ、この辺の梅雨の時期だったのか、下船した日も雨降りだったと思う。入れられた収容所も俄か造りの施設らしく、先に送り込まれた日本兵が千人くらいいただろう。飯炊き釜も五右衛門釜が五基くらい据えられていたと思う。しかし、近くに薪木らしい物も見当たらず、水が蛇口から出ているので飯盒で受けて驚いた。黄色の沼水で、とても飲めた物でない。三十分くらい沈澱させてやっと上水を飲んだが、泥臭い水だった。

ここでも夕方くらいになってもご飯が与えられない。先着者に聞いたら、毎日の雨降りで炊事場が露天で火が焚けないので、我々も昨日から何も食べていないとの話で、またここでもかと、ソ連の無計画という

か不手際に、どこまで我々を人間扱いにしないのかと悲しくなった思はいまだに忘れられない。三日間くらい泥水を沈澱して上水をすすり飲み、我慢するより仕方がない。四日目にやっと分けられたご飯がまた、ワラゴミの混ぜご飯かと思うほどだった。腹が空いている。食べたが口の中にワラが残り、これまた生まれて初めて口にした。後で聞いたら、釜の蓋がないので、米の入った釜カマスを蓋にして炊いたからとの言い分と、釜の底は沼水で炊いたため黄色で砂まじりと聞いて二度ビックリ。我々を人間と思ってないと憤慨した。この敗戦国の悲しさは実感した者でなければわからないと思う。

この仮収容所では、一時的な貨車待ち場所なので労働的作業は何もさせずに約一カ月くらい待たされたが、そのころの我々抑留者は、ソ連領のどこまで連れ込み、何をさせるのか、生涯帰れないのではと毎日不安の連続だった。私たちはこの場所に約一カ月滞在したが、六月下旬ごろから、ソ連の大型貨車（六十トンの有蓋車）を二段装置にし、一貨車に百〜百二十人

を十両で日本兵を一回に千二百人くらいずつ、それぞれの奥地へ抑留者を送り込んだと思う。

### 入ソの経緯

私たちは七月十九日ごろと思うが、前述の貨車に乗せられこの地を出発したが、中央部が両開きのドアで、入った所に便所が作られて、左右に二段目上がある仮階段があった。屋内には窓一つなく、入口ドアを閉めると昼でも真っ暗で夜昼もわからず、シベリア鉄道を北へ進んでいるのだろうとの想像で、牢屋に入れられた感じの連続だった。列車の速度は遅く、各駅ごとにとまったかどうかはわからないが、半日間一回もとまらず走ったこともしばしば。もちろん車内には電気電灯もなしだ。食事は列車中央部に炊飯車があり、ここで炊いた汁物や食事を、列車がとまった時点で伝令により「炊飯車まで食事を取りに来るように」と伝達される仕組みで、各貨車より十数人が湯茶水、食事の受領に行く。一日に二〜三回適宜にとまるが時間は不定期だった。ちなみに、一貨車に百二十人くらいず

つ乗っているが、下段に七十人くらい、二段装置上に五十人くらいだったと思う。この乗車期間が、終点まで十八日間かかったのには驚いた。乗車して十日くらいたったころ、列車が大きな都会らしい駅でとまり、約一口かけてこの町のプールに連れて行かれ、この大きなプールに入り相互交替で長い間の体の汚れを流した。こうしたことも何か月ぶりで一時的な解放感を覚えたのを思い出す。

その日の夕方には各貨車ごとに点呼を受け、再び乗車し、また走り出した。後でわかったのだが、この都市がシベリア鉄道中での中間地点で、ノボシビルスクだったと思われる。ここから南下する鉄道があり、分岐点だったらしいが、この路線も長く一週間走り続けた。この途中でも一日中とまらず走り続けるので日中の食事もなく、もちろん水もないので、皆が空腹と喉の乾きに耐えかねているとき、外が夕立気配なので、貨車の屋上に空気抜き穴があることに気づき、この空気抜き穴を突き破り、その穴下へ飯盒を当て、雨水を溜めて回し飲みしたことがある。この雨水の味と言っ

たら、一口飲んでも吐き出したいほど、何とも言いようがない味だった。

私はそれから二日ほどたったころ、急激に寒さを感じ体が大きく震えるようになり、それから二時間くらい震えがとまらない。それがどうにかとまったと思ったら、今度は熱くなり、体の置き場がないほどの高熱が出た。半日もしたら熱は下がったが、それから毎日午後になると、こうした症状が起こるようになった。

ちょうどそのころ、終点だと言う所で下車させられた。ところが熱病だということ、下車駅からこれら発病者等若干名は近くの診療所らしき所に入院させられて本隊を離れたのである。

この下車した所は、ソ連領カザフスタン共和国で、この方面では主要都市であるアルマアタであった。その日が「昭和二十一年八月七日」だったと記憶している。それから全治し退院して、一緒に送られて来た原隊に入所させられたが、元の原隊とは結局離れることになった。入所した收容所はアルマアタ市郊外で、この一角にはドイツ人抑留者も五十人くらいいたが、宿

舎は別棟だった。この地に、帰国するまで約二年（昭和二十三年五月末まで）滞在した

入院した診療所での待遇について

診察医師はドイツ人だったと思う。病名は俗に言うマラリアで一週間ぐらいで治ると言われたが、二―三日は高熱で四十一度まで上がったこともあった。この地へ着いてから当初に困ったことは、食物が合わない。まず主食は黒パン（酸味が強く三日間くらい空腹でも少しも食べられない）。副食スープ、付く物は生魚等々。

ところが一週間後からは少しずつ食べられるようになった。その後原隊に戻されたが、中隊、分隊は変わり、各隊からの混成班に所属となった。一個班十五人は北は秋田県から新潟県、南は熊本県出身者もあり、兵舎は煉瓦造りで、元倉庫だったような建物に木製で三段装置がなされ、一個班十五人でも一段目に五人、中段、上段五人で、私は中段だったと思う。従って一段、二段の者は座って頭がつかえないだけの高さだ。

昼でも暗く、馴れるまでは箱に入られたような感じだった。私の班長は富山県高岡市出身の旧軍隊では伍長だったようだ。この収容所に入ったのがたしか八月下旬だったように覚えている。

入所当時はこれといった仕事も与えられず、営内掃除とかコルホーズでの使役に各班から二―三人出せとの指示で、毎朝ソ連軍隊のトラックが何台か迎えに来て、一台に二十―三十人を乗せ、もちろんソ連兵（短銃持ち見張り引率者）が二人ずつ付添いで各現場へ案内された。現場に着くと現場監督がいて、作業指示に従い作業をする。コルホーズでの仕事は様々で、トウモロコシもぎ、甘藷掘り、収穫した野菜は麻袋に入れてトラックまで運んで荷台にバラ入れる。こんな仕事はもちろん雨降りには休む。二、三日すると場所も変わり作業内容も変わる。昼どき（時間はまちまち）になると収容所からロバ引き馬車で、昼食のスープと黒パン各人一切れを運んで来る。夕方仕事が終わるところには迎えのトラックが来て収容所まで送り届けるといった毎日であった。六時―六時半ごろに収容所に入



ると夕食チケットを受け取り、食堂で夕食をとる。

ここではどんな仕事も総てノルマが決められていて、作業を終えて帰るときに現場監督より「今日の仕事のノルマは何%」と、抑留者作業班長に証明書らしき紙を渡していたように思う。各班長はこれを食堂係員に渡して食券をもらい、班員各人に配る仕組みだったと考えられる。何分にもこの国では、作業能率結果の出来高ノルマの上中下で各人の食事の量が決められていた。この当時のノルマはいつも「上級 $\parallel$ 一〇〇%以上、中級 $\parallel$ 八〇 $\sim$ 九〇%、下級 $\parallel$ 八〇%以下」で、スープの食器一杯は平等で、黒パン、ときどき白パンも渡されたが、このパンの大きさが違うといった始末で、仕事能率によって食物量を差別される有様は、人間社会を離脱した行為と敗戦国の惨めさをつくづく感じさせられた。当時は食べ物に慣れず、まず第一に量が少な過ぎるので、夕食が終わっても食べた心地がしなかった。時折夕食に魚が出たが、これまた海に遠い関係か、湖か川で取れた塩漬生魚で、初めは焼く所もなし、生のまま渡されても食べようがなかった。腹は

空き、満腹感を感じたことは一度もなかった。入浴は週一回くらい入ったが湯船らしき物がなく、いつもシャワーだった。

#### シラミの発生、南京虫

私たちがいた収容所は前述のように煉瓦積倉庫だったらしく、窓も少なく、ほとんど風通しが悪く、三棟くらいあったと思うが片隅に平屋があり、そこにはドイツ人抑留者も百人近く収容されていた。初めはもちろん言葉も通じなかったが、お互い抑留者であり、特に戦時中、日独伊の三国協定を結んだという感情と相まって、身振り手振りで感情が通い、仲良く会話したものだ。

右記のような生活環境からシラミが大発生し、週に一回、下着交換回収はされたが、毎朝六時、営庭で点呼する際、皆、下着を脱いでシラミ検査を何回か行い、交換した下着は全部熱湯駆除されていた。また兵舎の中に南京虫が大発生し、夜暗くなると顔の上などへ無数に落ちてくる。これも舎内を密閉し薬剤駆除し

たことも度々ある。

また、各月毎に一回は所内全員の身体検査も行われ、一級から五級に次のように分別された。

- ① 一〜二級は健康者で重労働可能者
- ② 三級者は、病気気味で軽労働可能で舎内作業
- ③ 四級者は、負傷者、不具者で作業免除
- ④ 五級者は、病弱で別棟収容

私は前述の通り、夏秋を通じ時期的にマラリア（風土病とも言われた）で、発熱すると四十度を超えることがあったことから、入所して二年くらいは度々三級で、一カ月くらいずつ営内作業をしたことがあり、今考えるとこの病状があったお陰で三級体力の診断を与えられ、営内作業をしながら体力復旧をする余裕があったと考えている。いずれにしても、ここでは毎月一回の健康診断で一〜二級の者は営外作業現場に引き出されて重労働作業に従事させられ、冬場では零下三十度を下らない限りは営外作業に従事させられる仕組みである。従って、一カ月営内勤務につくと、決まっ

て体重が少なくとも二キロ〜三キロ増した。

初めてここアルマアタに収容された年はコルホーズでの農作業が多かった。この地方は、南には遙か彼方に山脈らしき山が見えたが、以外三方はいずれも大平原であった。

#### 労役のあらまし

昭和二十一年秋十月十八日に、夕方はみぞれだったのに、朝起きたら屋根が白く、霜かと思ったら、それがこの年の初雪だったのには驚かされた。

兵舎内はペーチカが焚かれているので室内は暖かく寒さを感じなかったが、一旦外に出れば一面銀世界だったのがいまだに忘れられない。こうした雪も空気が乾燥しているので、風吹くと見る間にどこかへ吹っ飛んでしまう。

前年（昭和二十年冬）は北鮮での露営の越冬で、極寒冷地での越冬はこれで二冬を迎えたのであるが、北鮮での冬よりさらに大陸的気候であった。真冬でも零下三十度以内なら野外作業だったが、冬には地下約一メートルまで凍ることは北鮮でも経験したが、ここで

は北鮮よりさらに深く凍ることがわかった。一月末だったと思うが、建築現場の基礎掘りを一週間ほどさせられたことがあったが、鉄棒一本与えられ、二人一組での穴掘りだった。鉄棒を直に持ったら手の皮が鉄棒に引っついて剥がれるので、革手袋を着ければならない。幅一メートル、長さ二メートルくらいが二人一組の掘り場だが、深さは一日に十センチくらいしか掘り下がないので、ノルマでは六〇%だと怒られたことも度々あった。

入ソ一年目の冬を終えて、翌年春からは、収容所よりトラックで三十分くらい走った現場の丘陵地に煉瓦工場があり、この地が私たちの作業現場だと連れて行かれ、作業内容の説明とノルマの基準も示された。そこはソ連人の囚人がかなり働いていた。この囚人たちは山を掘削し、土練りして土煉瓦を送り出す。私たちはこれを二百枚一山として、天日乾燥を約一週間して焼窯に入れる。焼窯は楕円形トンネルになっていて、一柵三千枚くらいずつ窯詰めし密閉し、これを境にして次の窯詰めを行う。窯詰め、窯密閉の済んだと

ころは、トンネル上に一柵ごとに焚口が設けられているので、上部焚口から石炭を投入して燃焼に入る仕組みで、この窯はほとんど夏冬を問わず年中稼働していた。

この燃焼は当工場専属のソ連人技術者だった。燃焼期間は約三日間くらいで焼き終わるが、冷却期間は二三日間くらいだったと思う。この焼き上がった煉瓦を取り出すのは我々日本人抑留者が担当して行う。素手で煉瓦を持つと熱くて火傷するし、煉瓦出しに入ると上部焚口から火の粉が落ちて衣服が燃えることも再三あった。煉瓦の取り出しは二輪車に積み、野外に二百枚一山として積み上げるといった作業工程だったが、この作業が、昭和二十三年五月、やっと近々ダモイ（日本へ帰る）というときまで続き、抑留期間中で一番長かった。約十四カ月だった。

前にも記したが、私たちの収容所はたしか第五とか言われたと思うが、総員、日本人七百余人にドイツ人抑留者四十―五十人くらいだったと思う。営外作業現場はバラバラ、仕事内容も種々だった。いずれの仕事

にも各々ノルマが決められていて、我々の収容所は当共和国の首都に当たるアルマタで、人口も百万人は超すだろうと推測した。市内電車も走っていたし、もちろん種々の工場もあった。従って、我々抑留者の中にも板金工、旋盤仕上工等々、機械技術者も何十人かいたが、この連中は夏冬、屋内作業でノルマが甘く、いつも一四〇％〜一五〇％を下らないので食事も一般者の倍量くらいあり、空腹感がなかったと聞いて羨ましかった。反面、我々のような無芸大食型は情けなく感じた。特に土工、農耕関係はノルマが高く、いつもせいぜい九〇％どまりだった。煉瓦焼きに変わってからは、どうにか一〇〇％を上回るようになって喜んだのも束の間、%が甘いということになって基準量を上げられたときの抑留者という悲惨さが忘れられない。

抑留一年目は一切、俸給等々ルーブルもなかったが、二年目半ばからは作業ノルマも大体一〇〇%前後になったので食事も少々増量され、気候風土にも慣れて、いつまでこの地に住まわされるのかわからぬが、

気持的には「あきらめ」気分になった時点から、少額ながら月給を支給されるようになった。月一〜二回の休養も与えられるようになった。しかし、休日に営外へ買い物等ができないため、作業現場で土着人と呼ばれる少々の黒パン、タバコ等を買出しできる要領も覚えた。また、たまの休日に収容所幹部職員から、自宅の補修や増築に、現在で言う「パート」を頼まれ、大工や左官経験者等三〜四人組んで外出したことが三回ほどあるのを覚えているが、そこでは非常に喜ばれ、食事もスープ、白パン、リンゴ等々をご馳走になった。そのとき、人間の付き合いの大事さと、人は何か特技を持つことも大切だと思ひ知らされたと同時に、「地獄で仏」との言葉がピタリだったという覚えがある。

営内ではときどき共産主義の講義も受けたが、第五収容所に移ってからときどき『日本新聞』も送られてきて、回覧または掲示されるようになった。所内でも所内新聞を月一回出すことを許可されて、五人ほどのグループで原稿を集め、印刷、回覧したこともあつ

た。

毎日の食事は、スープが飯盒の蓋一杯に黒パン一切れ(約一〇センチ角・厚さ三センチ)に、ときどき生魚が一匹つくのが一食分だった。米のご飯は年二〜三回、五月のメーデーと十二月二十四日のクリスマスと元旦くらいにお粥くらいで、我々二〜三人寄ると、餅・おはぎ・味噌汁等々、食べ物を主にした話ばかりで、果たして日本へ復帰できるか、いつまでここに居留するのか、不安の連続だった。

#### 抑留者の健康管理

労役につくことを猶予された者(前述の月一回の健康診断で三、四、五級に診断された者)は営外には出ず、三級者は営内外の掃除または炊事場焚口辺りで薪割り等雑役、四級者は炊事の手伝い、五級者は診療所入りか自己ベッドで休む等々。

診察医は、ドイツ人医師と三日に一度くらいソ連女医と看護婦各一人で巡回していた。いずれにしても、熱病なら体温三十八度以上か仕事に支障のあるような

負傷者のみが出役猶予で、以外はほとんど営外労役に服していた。

舎内、営内での娯楽は、入所当初は皆そんな気持ちも出なかったが、一応落ち着いてからは、楽器好きな人はどこからかラップバやバイオリンを取り寄せ五、六人で楽隊を編成し、メーデー、クリスマスには営庭にステージを作り音楽会を催したこともあった。昭和二十三年のメーデーでは営内に土俵を作って相撲大会を催した。同所内の大柄のドイツ人対日本人の相撲大会を開き、小柄の日本人が大柄ドイツ人を見事に投げ飛ばし、大拍手で湧いた思い出が今でも忘れられない。

収容所内では夏冬を通し朝起床五時半、「点呼」で全員営庭に十列縦隊、点呼者は陸軍中尉のソ連軍所長。夏場はよいが冬場では零下三十度を下回る日があり、病気で出られない人の室内確認が済むまで一般人は外に立たされたまま、人数が合わないので一時間も立たされたこともしばしばあって、そのため凍傷になった者も何人かあった。

零下三十度以下になると営外作業は中止で、この日

は宮内で自由時間であり、囲碁、将棋もできて楽しみな日もあった。また私は復員の前年十二月ごろ、当年における作業成績優秀者として選考され、十日間ほど好待遇で有給休養を与えられて、短期間に体重が急増したことがある。

毎晩、各班回りで二人ずつ不寝番の割り当てがあり、この者は便所の水割りが主な仕事である。これは寒冷のため用使物が総て氷になり積み上がるからで、これらを鉄棒で掘削せねばならない。寝泊まりしている兵舎は夜中ペーチカで石炭を燃やすから暖かいが、便所は外のため、一步外に出ると鼻の穴まで凍る。

こうして過去五十年前を遡って見るとき、飢えと寒さと重労働を強いられながらも生きてこれたと思議に思うことがある。昔からの格言に、「人間一生の間にもう人生の最後だということが三回ある」と聞いているが、私の場合は、抑留期間中だけでもこの何倍もあったと思う。しかし、これを支え越えられたのは……と考えたとき、私は、自力、他力といろいろ言われるが、神仏の加護はもちろん、我が身を生み育て

られた先祖各霊の加護を忘れてはならないと思う。

ソ連現地にいる間に片言交じりと身振り手振りです連兵と話す機会も重々あって、我々はいつごろ日本へ帰されるかと質問したことがある。すると、南方のヒマラヤ山脈の頂点を指差し曰く、彼の山の雪が消えたらダモイ（帰れる）と言っていた。ということは生涯帰れないことを意味しているとさえ考えられ、愕然としたこともあった。しかし、その時すぐ、こんな異国で挫けてなるものかと我が身を振り返った。

#### 帰還関係

昭和二十三年五月二十六日ごろ、当時の作業現場より夕方收容所に帰り、夕食を済ませ宿舎に戻ったとき、誰かが「オーイみんな、日本へ帰れるようになったらしいぞ」と言う声が聞こえた。煉瓦建て三段装置の各所は騒然となった。今まで何回もだまされて来たが、今度は本当らしいとのこと、そのうち、いよいよ我々も日本へ帰還できることになったので明日からは各作業は中止とする、明日中に帰途につくので引揚げ

準備を終えるよう、正式に伝えられた。

五月三十日、各人携帯品を持ちアルマアタ駅まで徒歩で行き、貨車に乗った。昭和二十一年八月に乗って来た貨車も六十トン車に二段装置だったので、一貨車に百二十人くらいも乗ったが、今度は二段でなく、従って半分の六十人くらいで帰路についた。それから十日間走り通しで、六月八日にナホトカ收容所に到着したが、帰りの貨車は窓も開放され、走行中も出入口の引戸は自由に開閉できて、外を見ながらの旅と帰国できる喜びで、旅行気分のように終点ナホトカ駅に到着した。

途中、世界一大きいと言われるバイカル湖が、六月上旬というのにまだ波打ち際が凍っていたのには驚き、今でも記憶に残っている。その当時は、毎日のようにシベリア奥地から帰還列車が到着し、港には日本からの迎えの貨物船が入りするらしく、収容所も港も人の波でごった返していた。船待ち日があつて六月十一日に乗船し、翌十二日早朝、舞鶴港が見え始めたが、それまでに何回も騙されたので、舞鶴の港が見え

ながら、ここは本当に日本かなあとまで思ったくらいだ。

下船上陸して何年かぶりに日本の土地に足を下ろしたときの気持ちは感無量だった。当日はここに一泊し、早速自宅へ電報を打ったのだが、国外地に出て以来三年二月、一回も文通せず、実家では生死さえわからない年月は、今にして思えば短いようでも長い年月だったと思う。

翌十二日朝、早速解放されて、舞鶴駅から汽車で福井へ。福井駅で下車したが、迎えに来ているはずの妹が出迎えに来ていない。他に五、六人降りた人は家族親類に出迎えされ、抱えるようにして連れ帰られるのに、私は一人ぼっちだった。これは、私が抑留中に武生から池田行きのバスが運行するようになっていたの、妹は武生駅で下車すると思ひ込み、武生駅で待っていたのだった。ところが福井でそのことを知ったので武生へ上り、会うことができた。

帰還して驚いたことには、帰還前年の八月に我が集落は大火で、自宅、土蔵共に焼失し、祖母と妹二人は

親類の土蔵に仮家として住んでいて、私は命拾いして命からがら帰還したのに住む家がなく、焼け野原に立たされたのには再度驚いた。しかしこのときも、この淋しき、哀しさは忘れて、人生の再出発とそのときに決めたのであった。幸い、近くに私の母の実家があり、叔父もおられたので、そのとき住宅建築の準備ができ上がりつつあって、当月二十七日には棟上げをさせていただいた。

入隊前に県警察職在籍のまま入隊し、敗戦後引き続き抑留生活と短年の間の出来事だったが、警察官も辞退し、以来家業を継いでいる。今現在、戦後五十余年を生き抜いた経験を大いに生かし、今後の余生を有意義に過ごしたいと思っている。

## 招かざる宿命

福井県 大谷 小之吉

終戦のとき一番若かった(当時の初年兵)者が、も

はや八十歳に近づき、寄る年波には勝てず、入退院の繰り返しや、健康であっても老いの身は心身共に脆く、戦友会や抑留会の案内状が折角来ても県外の場合代、北滿の軍隊生活は我等戦友の最高の思い出であり、またソ連抑留中の辛酸は、その体験者が生死の極限を乗り越えて帰還できた喜びと、また、一緒に帰れず異国の土となった同胞には、深甚なる哀悼の意を捧げたい。

さて、私が特に印象に残っている思い出を記してみよう。

昭和二十年九月十五日、私たちも黒龍江を渡河し北へ北へと徒歩で進む。一週間を過ぎたころコルホーズ(集団農場)で馬鈴薯の収穫をさせられつつ、ライチハ收容所に着く。どこの收容所も同じだったろうが、昭和二十年の越冬が一番厳しかった。被服が悪いので寒さが骨身に凍みる。

食糧が乏しく、そのうえ雑穀等は精白されないまま